

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：32638

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12901

研究課題名（和文）組織学習を促進する多様性における管理会計の役割についての経験的研究

研究課題名（英文）An empirical research of management accounting's role in managing diversity for organizational learning

研究代表者

李 燕 (Li, Yan)

拓殖大学・商学部・准教授

研究者番号：40612875

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、多様性に対する管理会計の役割を、異なる価値観の共存という視点から、経験的研究を通じて明らかにすることを目的とする。定性的事例研究、および定量的研究を通じて、本研究では異なる価値観の統合に関する様々な文脈、すなわち組織内の異なる部門間、子会社と本社間、企業とNGO間の関係において、管理会計やマネジメント・コントロール・システム、業績管理システムは、関係者間の価値観を可視化し、統合するうえで役割を果たすことを明らかにした。また、本研究からはこのような異なる価値観の統合には、欧米的な文脈とはことなる日本の文脈の特徴があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多様性とは、組織や社会において何が重要で、何に価値があるか、何を重視すべきかという評価原理が複数存在していることを意味し、現代の組織や社会に普遍的に存在する問題である。本研究では、様々な文脈において、広い意味での会計実践が関係者同士の価値観や立場を可視化し、それらの価値観の共存を促進する役割があることを明らかにした。本研究の成果は、複数の多様性の文脈、包括的で社会的組織的文脈における管理会計の役割、そして日本の文脈の特徴を明らかにしている点において学術的な意義がある。また、グローバル化やSDGsの社会における認識の広がりなどを考えると、多様性の問題は社会的に重要な課題になる。

研究成果の概要（英文）：This research aims to clarify the role of management accounting for diversity through empirical research from the perspective of the coexistence of different values. Through qualitative case studies and quantitative questionnaire survey, this research shows that management accounting, management control systems and performance management systems play a role in visualizing and integrating values between parties in various contexts, i.e., between different departments within an organization, between subsidiaries and headquarters, and between company and NGO. The research also shows that the way in which these different values are visualized and integrated has characteristics of the Japanese culture, which is different from previous studies based on the Western context.

研究分野：管理会計

キーワード：異なる価値観の共存 業績管理会計 マネジメント・コントロール 日本の文脈の特徴

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

グローバル化, ネットワーク化が進む中, 多様性は現代の組織や社会に普遍的に存在する問題である。多様性とは, 組織において何が重要で, 何に価値があるか, 何を重視すべきかという評価原理が複数存在していることを意味する(Stark 2009)。両利き経営, 建設的不調和, ヘテラルキー型組織などの研究においては, 組織に存在する多様性は, 組織ぐるみの対話を促進し, 学習と創造, イノベーションの源泉になるとされている(Gibson and Birkenshaw 2004; Stark 2009)。しかし, 多様性には異なる次元や種類があり, 多様性から生まれる見解, 方針などはすべて不安定であり, 組織の中に多様性があれば学習と創造, イノベーションが生まれるわけではない(Page 2007)。したがって, 組織組織学習やより多様な社会を実現するための管理会計については, 異なる文脈における経験的研究の蓄積が必要である。

2. 研究の目的

本研究では, 組織学習を促進する多様性に対する管理会計の役割を明らかにするために, 多様性が文脈の特徴として考えられる複数の企業に対するインタビューやアンケート調査を通じて, 経験的研究を蓄積していくことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) まず本研究では, インタビュー調査を通じた事例研究を行った。企業組織, NGO の複数の関係者を対象に, 反構造化インタビューを実施した。インタビューは, 企業組織の代表取締役, 上級マネージャ, 中間管理職から一般従業員まで, 様々な階層の人を対象にする。また研究プロジェクトに関連がある NGO や対象企業組織と協力関係にある企業の関係者についてもインタビュー調査を実施した。2018年4月から2021年3月まで, インタビューの実施回数は, 約20回である。

(2) また, 研究対象者の合意のもと, 本研究では研究対象の企業や関連組織における会議, 講演会, イベントなどに直接参加し, 参与観察を行った。参加回数は, 2018年4月から2021年3月まで, 約20回である。

(3) 最後に, 本社と子会社間の関係に関する研究においては, 2018年6月から8月までに, 東洋経済社出版の「外資系企業総覧」に掲載されている在日外資系企業のうち, 資本金1億円以上, 外資比率50%以上の企業を対象に, アンケート調査を行った。対象企業数は842社で, 社長・取締役など, 外資系企業の日本子会社の経営層の個人宛に質問項目を郵送し, 72社から回答を得られた。

4. 研究成果

本研究からの研究成果は大きく分けて以下の3点である。

(1) 様々な文脈における多様性の問題に対する管理会計のかかわりの包括的に理解

上述したように多様性を異なる価値観の共存と捉えた場合, それは現代の組織や社会において様々な次元において存在する問題である。本研究では様々な文脈における価値観の共存について, 管理会計がどのように関わっているかについて経験的に明らかにした。具体的には, 以下のような3つの文脈である。

まずは, 一つの企業組織における部門間関係である。Fujino, Li and Sawabe(2018)では, ある包装容器を製造・販売する企業に対する事例研究を通じて, 営業部門と製造部門のマネージャたちが, 業績指標を利用して, お互いの評価原理や立場を理解し, 継続的な相互作用を通じて関係性を維持していることを明らかにした。

次に, 本社と子会社間関係である。李(2019)では, 日本における外資系子会社に対するアンケート調査を通じて, 業績管理システムがどのように子会社のマネージャたちが感じる本社と子会社間関係, 親会社の国と日本市場に対する理解を高めているのかについて検証した。

最後に, 企業と NGO 組織間の協力関係に基づいて, 環境保全と経済発展の共存目標とするある環境保全プロジェクトに対する事例研究を通じて, Li and Sendo(2020), 李(2020)では, 持続可能性に関するマネジメント・コントロール・システムが, 企業と NGO 組織などとの協力関係を維持する上で果たす役割を明らかにした。

このような研究は, それぞれの単独の研究として論点異なるものの, 組織や社会に存在する異なる価値観の共存を目指すという視点からは共通する点がある。

(2) 管理会計の役割に対する包括的な理解

近年の管理会計の研究では, より包括的な視点からの研究の必要性が指摘されている(Malmi and Brown 2008; Ferreira and Otley 2009)。本研究では, 管理会計について, 特定の管理会計

の技法ではなく、様々な会計実践を取り上げている。

一つは、業績管理会計または業績管理システムである。Fujino, Li and Sawabe(2018)では一つの企業組織における異なる部門のマネージャたちが、日々の業務活動が彼らの業績に与える影響を巡って相互作用を行うことを明らかにした。それに対して、李(2019)では、業績管理システムの研究が、日本における子会社のマネージャたちの業務理解を支援するか否かについて、Adler and Borys(1996)やAhrens and Chapman(2004)のイネープリング公式化/マネジメント・コントロール・システム/業績管理システムの理論的フレームワークを用いて検証した。

もう一つは、広い社会的文脈における会計の実践である。Li and Sendo(2020)では、近年管理会計で援用される Actor network theory の理論的フレームワークを利用して、企業や NGO のような社会を構成する異なる主体が協力関係のもと環境保全に関するプロジェクトを展開し、そこに会計の計算や実践がどのように関わっているかについて明らかにした。また李(2020)では、持続可能性の価値観を企業組織のビジネスに統合する上で、おけるマネジメント・コントロール・システムが果たす役割について明らかにした。

(3) 日本的文脈の特徴

最後に、本研究では多様性に関する異なる価値観の共存について、欧米的文脈を前提とする先行研究とは異なる、日本的文脈の特徴を明らかにした。李・藤野(2018)、Fujino, Li and Sawabe(2018)における発見は、異なる価値観の共存に対する会計情報の可視性は、日本の相互依存的自己観のもと、組織メンバー間の相互作用を継続させるものであることを示した(李・藤野 2018; Fujino, Li and Sawabe 2018)。これは欧米的独立的自己観における一時的な妥協による共存関係(Chenhall 2013; Kraus et al., 2017)とは異なる。

また日本においては、こうした相互作用が企業内の組織成員間を超えて、企業と NGO 間の長期間にわたる協力関係を可能にし、そのもとで環境保全と経済発展の共存が実現されていることを明らかにした(Li and Sendo 2020, 李 2019)。これは、環境問題に取り掛かる関係者たちの自己利益が優先され、環境問題自体へは無関心であるという欧米的文脈での発見と対照的である(Day and Russell 2014)。

参考文献

- Adler, P., and B. Borys (1996) Two types of bureaucracy: Enabling and coercive. *Administrative Science Quarterly* 41(1): 61–89.
- Ahrens, T., and C. Chapman (2004). Accounting for flexibility and efficiency. *Contemporary Accounting Research* 21(2): 271–301.
- Chenhall, R. H., M. Hall and D. Smith (2013) Performance measurement, modes of evaluation and the development of compromising accounts. *Accounting, Organizations and Society* 38: 268–287.
- Dey, C., and S. Russell (2014) Who speaks for the river? In M. Jones eds, *Accounting for Biodiversity*. Routledge.
- Ferreira, A., and D. Otley (2009) The design and use of performance management systems: An extended framework for analysis. *Management Accounting Research*. 20(4):263–282.
- Gibson, C., and J. Birkinshaw (2004) The antecedents, consequences, and mediating role of organizational ambidexterity. *Academy of management Journal* 47: 209–226.
- Kraus, K., C. Kennergren, and A. Unge (2017). The interplay between ideological control and formal management control systems, *Accounting, Organizations and Society* (67): 42–59
- Malmi, T., and D. Brown (2008). Management control systems as a package—Opportunities, challenges and research directions. *Management accounting research* 19(4): 287–300.
- Page, S (2007) *The difference: How the Power of Diversity Creates Better Groups, Firms, Schools, and Societies*. Princeton University Press.
- Stark, D (2009) *The Sense of Dissonance*. Princeton University Press (中野勉, 中野真澄訳 『多様性とイノベーション』)
- 李 燕・藤野 雅史(2018) 「組織メンバー間の相互作用プロセスにおける管理会計の役割」 working paper, College of Economics, Nihon University.
- Fujino, M., Y. Li, and N. Sawabe (2018) Effects of disaggregated performance measures among managers with interdependent self-construal. Melco Management Accounting Research Discussion Paper Series. (No.MDP 2018-004)
- 李 燕(2019) 「在日外資系子会社の業績管理システムの公式性」『経営経理研究』116: 35-52.
- 李 燕(2020) 「社会的課題をビジネスに統合するマネジメントコントロールに関する事例研究」日本原価計算研究学会 2020 年度関東関西合同部会.
- Li, Y and A. Sendo, (2020) Accounting inscription in social significance: A case study of a Biodiversity project to connect Borneo and Japan. 2020 Critical Perspective on Accounting Conference.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 李燕	4. 巻 116
2. 論文標題 在日外資系子会社の業績管理システムの公式性およびイネープリング認識について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経営経理研究	6. 最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 李燕
2. 発表標題 在日外資系子会社の業績管理システムの公式性および イネープリング認識について
3. 学会等名 日本原価計算研究学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 李燕・潜道文子
2. 発表標題 ソーシャルイノベーションにおける会計銘刻の役割 - 生物多様性保全の取り組みに関する事例研究 -
3. 学会等名 日本管理会計学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fujino, Li and Sawabe
2. 発表標題 Incomplete performance measure from a collectivistic view
3. 学会等名 European Accounting Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fujino, Li and Sawabe
2. 発表標題 Effects of disaggregated performance measures among managers with interdependent self-construal
3. 学会等名 神戸大学大学院経営学研究科「計算と経営実践ワークショップ」(主催者：國部克彦教授)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 李燕
2. 発表標題 社会的課題をビジネスに統合するマネジメントコントロールに関する事例研究
3. 学会等名 日本原価計算研究学会2020年度関東関西合同部会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------